

岩崎純一歌集	『新純星余情和歌集』>恋の部				
歌集名読み	しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者	岩崎純一				
通釈・語釈	園井長光、長光たき、戸井留子、武田あさあ、蝶子、沙月式部、雪笑少納言、岩崎純一(自釈)				
作者サイト	http://wasakijunichi.net/				
和歌ページトップ	http://wasakijunichi.net/waka/				
自撰日	恋の題	歌 岩崎純一歌	通釈	語釈	他歌人欄(評)
2008/4/3	寄月恋	もとの身にならぬばかりの冬がれに心は春の月ぞ出でなむ	すっかり変わってしまった私の境遇。それは冬枯れのような別れでしたが、早く心が晴れるような春の月が出てほしいと思っています。	◇掛詞「実(に)生らぬ×身にならぬ」「枯れ×離れ」「春×晴る」 ◇参照「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(在原業平『古	
2008/4/5	寄月恋	ただわが身もとの霞の春の月日に異(け)にかたき恋心かな	私の身ばかりが何も変わらず、むしろ霞んだ春の月のもて日に日にいつそう固まってゆく恋心です。	◇掛詞「春の月×月日×月に日に異に」 ◇参照「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(在原業平『古	
2008/4/10	寄月恋	瀬をはやみ折りにそ岩に砕けなむただかたへより流らふる川	川瀬の流れが速いので、この折に岩に当たって砕けてほしい。ただ片方からしか流れない川のような片思いが。	◇本歌取「瀬をはやみ岩にせかる滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ」(崇徳院	
2008/4/10	寄月恋	あふよしを涙もかれて水無瀬川ただ下恋にうつもる袖	ただ秘めているだけの恋なので、お会いするすべもなく、やがて顔の涙は水無瀬川のように涸れましたが、袖が涙で埋もれたことです。	◇掛詞「涙×無み」 ◇枕詞、歌枕「水無瀬川→下」	
2008/4/10	寄雪恋	うつぶして色かはる間におとなひし染むひまもなき袖の白雪	うつむいて泣き、袖の色が紅涙で染まっている間に、降ってきました。もう染まるどころがない袖に、白雪が。		
2008/4/10	寄雪恋	足かたの行き増す先にことづけて心明かさむ浜ゆる風花(かさばな)	これ以上歩いて足跡が増え、雪も降り増さってくる前に、澄んで降る雪に乗せて、心を明かしたいものです。	◇掛詞「行き増す×雪増す」	
2008/4/11	寄花恋	散らしなで香のみ乙女が袖うつせ花水川(はなみづがは)にいやさそふ風	桜を散らさないで、その香りだけを女の私の着物に移して下さい。ああ、花水川にやってくる、桜の花を誘って散らす風よ。	◇参照「梅の花香をのみ袖にとどめ置きてわが思ふ人は音づれもせぬ」(在原業平『新古今』) 「散りぬとも香をだに残せ梅の花 恋しき時の思い出にせむ」(『古今』) ◇「花水川」:神奈川県平塚市(「波奈美頭可	
2008/4/11	寄池恋	名残惜し潮入の池うたかたの妹(いものうたたね風)に消えつつ	名残惜しい。潮入の池の泡沫のような女のうたた寝が、風に消えゆく。	◇「潮入の池」:浜離宮庭園	
2008/4/12	寄橋恋	さそ定め告げられし恋竹橋を我のみ戻る猛(たけ)き末かな	これは運命だと思うと告げられた恋。その場所である竹橋を自分一人で戻った。それも自分にできる精一杯のことであった。	◇「竹橋」:御内方通行橋(別本慶長江戸図)	
2008/4/12	寄月恋	恋ひそめてまたき渡りし相模川またの渡りも時のまにまに	何となく恋心がありましたので、会えるということで早くも相模川を渡ってお会いしましたが、また渡るかどうか、それは時の流れに任せることです。	◇歌枕「相模川」	
2008/4/12	寄花恋	杜若あやめも知らず咲く色に見ぬ花しやうぶ香によそへつつ	あやめの心も知らずに咲いているかきつばたの色に、私はまだ見ていない花しょうぶの香りを重ねて心が揺れる。私を好いている女と面識がありながら、それを知らないで私と会っている別の女の姿に、まだ会っていないさらに別の女の魅力を重ねて心が	◇掛詞「文目×菖蒲」 ◇参照「我のみやかく恋すむかきつばた丹つらふ妹はいかにかあるらむ」(『万葉』)	
2008/4/12	寄夢恋	世籠(よごも)れるをしき乙女にめぐりあひ夢もせはしき恋の道かな	世間を知らない愛らしい女に出会って、それが夢にまで出てきて忙しい恋の道だ。		
2008/4/13	寄池恋	玉藻池(たまもいけ)散り溜まらぬは密(みそ)かなる心の花をよそに深めて	玉藻池に桜の花が散り溜まらないのは、密かに他の池に花が散り溜まるように、あなたが他の女性に思いを寄せているからです。	◇「玉藻池」:新宿御苑	
2008/4/14	類	春雨に染(そ)め深められ貌花(かほばな)の色ぞ集めて袖に落ち積む	春雨が細く降り、そのせいで濡れて染み深められた貌花の色を集めて、袖に落ち積もる露のように、春雨と涙が、最初は細いながらも赤い顔の色を集めて袖に落ち、積もつ		
2008/4/14	寄花恋	限りやと契りもはるの花惜しむその言の葉に我もおひてむ	これが最後ですか。花はもう散りましたね。またお会いしたいです」との約束が遠く遠くになってしまわないかと思っている女。その言葉に、私も追って快く承諾しようと思う。花のあとには葉が出るように。	◇掛詞「春×遥(か)」「生ひ×追ひ」 ◇縁語「春、花、葉、生ふ」	
2008/4/14	寄簪恋	深き夜を梳(す)く春雨の染(し)む花の簪濡れし黒髪にふる	黒髪のように深い夜を梳き、向こうを透き通らせて降る春雨が、春の花に染み入るように、その春雨で花の模様の簪が濡れ、黒髪も濡れ、その黒髪にそと触れる。	◇掛詞「透く×梳く」「降る×触る」	
2008/4/14	有明恋	心あらぬ別れかたみに露の間もあたら映れる有明の空	不本意ながらの別れの受け入れがたき、その別れ形見として、お互いに袖に涙を落とす間も、時間が惜しいとも言うかのように、袖の涙に映っている有明の月の空。	◇掛詞「難み×形見」「露の間(涙の間×束の間)」	
2008/4/14	探恋	みさを絶え水門(みと)を任する舟をなみひとり我が身をつくしてぞ漕ぐ	棹で漕ぐのをやめて、水門を渡るのを任せる船頭がいないので、私は命がけで舟を漕いでいます。操を捨てて体を任せることができる人がいないので、操を捨てないでいるのです。	◇掛詞「水棹×操」「水門×みと」「波×無み」「濡襟×身を尽くし」 ◇縁語「みさを、水門、舟、なみ、みをつくし、漕ぐ」	
2008/4/15	寄葵恋	いつか摘むともにあふひを願ひかけつれなき我を待ち過ぐすらむ	共に葵を摘むように、男女の共寝を積み重ねていく時がいつか来てほしいと、心に願ひ、薄情な自分を待ち過ごしているのだろう。	◇掛詞「葵×逢ふ日」「摘む×積む」	
2008/4/15	寄鵲恋	かくばかり我が心根(こころね)を語らへば今はた鵲の草ぐきもなし	これほどあなたへの自分の恋心を語ってしまいましたので、今さら鵲の草ぐきをすることもできません。隠れようにも隠れられません。	◇「鵲の草ぐき」 ◇縁語「根、草」	
2008/4/15	寄舟恋	一日のみ由良の湊に寄り泊ていつこともなくまた楫緒(かぢ)絶つ	一日だけ由良の湊に寄り泊まって、あのの人に会い、再び自ら楫緒を絶ち切って、どこも知れず、どの人に落ち着くとも知れず、海に出てゆきます。		
2008/4/15	寄藻恋	そこばくの藻の寄る辺なみいかにして干せるここのは浜を頼めむ	多くの藻の抛り所がないので、それをどうやって波に乗せて、さあここだという浜に打ち上げて乾かすことができようか。一人の男に一人の女が寄ってくるといううようど良いことが、なぜ世の中にはないのでしょうか。		
2008/4/15	寄霧恋	朝霧に返しし否(いな)の文ばかり暗(く)れ感ふ露浅くあらなむ	朝霧の立ちこめる日に返した、「会うことはできない」との手紙ほどに、女がこの手紙に落ち込んだ時の涙も浅くあつてくれたならば。		
2008/4/15	寄海恋	うきめこそあまたかりしか今我は小舟いくそのみをつくしか	自分でも、これまでに小舟に乗って、女から振られるという憂き目を見てきたが、今は自分が、何艘の小舟という女の目印になっているだろうか。	◇掛詞「浮き海布×憂き目」「数多×海人」「幾十×行く」「濡襟×身を尽くし」 ◇参照「源氏」須磨」	◆誇張された反逆表現。(長満たき) ◆「源氏物語」の「須磨」をモチーフとしていて情熱的。若干、言葉足らずの感。(園井長光)

2008/4/18	寄絵恋	誰(たれ)となく描く妹だに我が身とぞ恋ふる心は思ひ入るべき	自分が、誰を描いたということもない、ただ女を描いたというだけでも、自分に恋をしている女の心は、「自分を描いてくれたのだ」と思い込むものだ、それが女の可愛さとい		
2008/4/18	髪	梳(と)き終へてすこし露けき髪にさへ細かに月の影ぞ散り敷く	梳き終わって少し湿っている私の髪にまでも、月の光は細かに散って映っております。		
2008/4/19	寄海女恋	袖濡らす海女がうちをばあけあへずあはれ常夜(とこよ)に雨間(あまま)頼ま	袖を濡らす海女の心の内を開けることもできず、その明けない永遠の夜のような女の心を知るために、ああ、雨がやむ時を期待しようか。	◇掛詞「内×家」「開け×明け」	
2008/4/19	直香	袖別れ残る直香(ただか)の身に染みて面影霞む春の夜の夢	涙して別れた女の直香が残っているのが身に染みて、その女の面影がぼんやりと心に見え、その出会いの春の夜の夢のような儚さ。		
2008/4/19	涙色	東雲の明け白むほど染(し)み余る袂の露の色ぞ艶めく	東の空が次第に明るくなっていくにつれてますます、染みきらないでこぼれている袂の露の色が艶が増えてゆく。		
2008/4/19	忍泣	片泣きのかかる髪結ぶ夕影に風の吹き添ひ露ぞかがよふ	一人泣きのかかる涙のかかる、こんな髪を結う夕方の女の姿に、風が吹き添い、涙もきらめき揺れる。		
2008/4/20	忍恋	品川のしののけに携(しな)ふ忍草(しのぶ)さしば降る雨にのぶるよしなし	品川や芝で見た、しっとり濡れてしおれている忍草のように、私は忍ぶ恋をしているけれど、しきりに降る雨に、しっかりと伸びる手立てもない、思いを述べる手立てもございません。	◇掛詞「伸ぶる×述ぶる」「しば×芝」 ◇音「しながは、しののけ、しなふ、しのぶ、しば、よし、なし」 ◇「品川、芝」 ◇音「シ行」	◆「品川」「芝」は近世以降に栄えた地で、歌枕とは言えないが、上四句の頭韻と結句のシ音が生きていて良い。(長満たき)
2008/4/20	寄磯恋	磯(そ)なれ木(ぎ)のかたみに寄するよすがにと頼む風吹く我が身ばかりに	地面に傾き合っている木々のように、互いに寄り合う手立てとしようとする期待する風は、私の身にばかり吹いて、あの人には吹かない。		
2008/4/20	寄海恋	よそに寄るそなたの海を漕ぎ回ひていつこの舟瀬(ふなせ)泊(は)てて見ゆる	よその女に心を寄せ、私にはよそよそしいあなたが出て行ったほうの海へ、私も漕ぎ出て回って、どこかの舟瀬に寄れば、あなたに会えますか。		
2008/4/20	有明恋	憂きながら夢に見し夜は片恋ひも何かあはれの有明の空	つらいけれど、恋する人を夢に見た夜は、片想いの恋も、どこかしみじみとあわれで、その夜が明けて、有明の月が残っている空です。	◇掛詞「あはれの有り×有明」 ◇参照「憂きにそふあはれに我も乱されて一方にしもえこそ定めぬ」(進子内親王「風」)	◆特に本歌と言えるものは見られないが、左記の進子内親王歌の動揺を乱れ少ない哀惜に変えた応用とも言える。(長満たき)
2008/4/20	待恋	待ち侘ぶる袂の月は昔にてその影を揺る露ぞ色添ふ	好きな人を持って疲れ、涙の落ちる袂に映る月は、昔のままで変わりませんが、その月の姿を揺らす涙だけがずっと流れて増え続けて、紅涙の色を増しております。		
2008/4/21	後影	なにどなき髪のはだけにほの見えて夜を色ふ背の影の幽(かそ)けさ	何となく掻き上げた髪の間から少し見えて、夜の暗さを彩っている女の背中の姿の淡い様。		
2008/4/21	移香	白露の置ける筵に片敷けばなほ染み渡る袖の移り香	白露が降りている筵、涙も落ちている筵に、一人で袖を敷いて寝ると、いっそう女の移り香が袖にも筵にも染み渡る。	◇枕詞「白露の一置け」	
2008/4/21	赫	つれづれに起き臥すごとに衣落ちて臙月夜のつづむかかやき	しみじみとして何とはなしに起きたり寝たりしているうちに、女の寝巻が肩から落ちて、臙月夜がその女の跡に匂いを包む。	◇参照『源氏物語 花の宴 賢木』	◆『源氏』の臙月夜をモデルとした、同じく臙月夜の官能の旋律。(園井長光)
2008/4/22	舟上恋	いかにせむ我が楫枕ひとり寝に逢瀬の方をとへる伴人(ともびと)	いかにすべきか。なすすべもない。私が舟上で一人で寝ているところに、逢瀬という舟瀬はどこですか、と尋ねてくる、共に舟に乗っている女を。	◇参照「浦つたふ磯の苫屋の楫枕」(『千載』)	◆「楫枕」の語は前例ある歌語。(園井長光)
2008/4/22	黒髪	解き衣(ぎぬ)のまる寝乱れし黒髪にかさむ秋風細りそめよく	縫い糸をほどいている衣を着て、一人で寝る。乱れた黒髪に秋風が吹くので、その秋風が霞み、髪のように細くなって、そよそよと吹く。		
2008/4/23	片恋涙	玉の緒の乱るる髪にとめあへず滑り散りほふ片恋ひの露	玉を通してお紐のような髪の乱れに、片想いの涙の玉はとめておくことができず、そのまま滑って散らばっている。	◇枕詞「玉の緒の一乱るる」	
2008/4/24	寄雨恋	誰が袖にきて深さぞ降りまざる眺めの空は答へはせぬ	どの女の袖に、特に雨が降り、涙が落ちているか、自分が今眺め耽っている長雨の空が答えてくれたらよいのに。	◇掛詞「眺め×長雨」	
2008/4/25	寄雨恋	たまさかに露のよすがの身となりてされば夜さらに我に降りしく	思いがけず、色んな女の涙が寄せてくるよすがとなった我が身であるから、なるほど、こうして夜に、自分に向かって雨が追いついて降ってくるのだろう。	◇掛詞「寄す×縁」「然ればよ然り×然れば夜さらに」「降り敷く×降り及く」	
2008/4/25	惑恋	ふみまどふこひちの間に眺めして我が身しるべのあとも消えつつ	手紙を出そうか迷う恋路を、泥を踏みつつ歩いている。物思いに降ってくる長雨のせいで、恋する人が私の身の行方を知る私の足跡も消えてゆく。	◇掛詞「文×踏み」「恋路×泥」「眺め×長雨」「知る×導」	
2008/4/26	寄坂恋	片恋の坂を振り放(さ)けかくばかり来しをあはれむ心ありせば	片想いの恋の坂を振り返って、ああ、こんなにも登ってきたのだなあとしみじみする心が、今の私にもしあつたならば。	◇「恋の坂」:「人に登れる恋の坂」(『反魂香』近松)	
2008/4/28	元香	元つ香そ袖の返しにほのめきて色づく秋の風も夜を露(き)る	女が生まれつき持っている香りが、袖を裏返す時にほのめいて、その香りで色づく秋の風も、夜に露をかけたように吹き、女も涙で目がかすむ。		
2008/4/28	遠恋	思はくのあなたの月ぞ漏れ入りて夜の錦に袖ぞもみづる	思いを寄せる人がいる方角の、遠い遠い月の光は、私のいるところにも漏れてきて、私の袖を紅葉のように色づかせる。何の甲斐もないことであるのに。	◇「夜の錦」	
2008/4/28	契久恋	忘れし言の葉に落つる白露はやがてあふれて結ぶ間もなし	忘れないよというあの人の言葉は嘘で、草の葉に落ちる白露のような私の涙は、ずっと溢れて、霜のように凍る間もない。	◇掛詞「言の葉×葉」 ◇縁語「葉、落つ、白露、あふる、結ぶ」	
2008/4/28	紅忍音	白妙の衣の袂に紅(べに)染みて漏るしのび昔の色かなしき	白い着物の袂で顔を隠した女の口紅が、袂にうつる。袂の隙間から漏れる忍び泣きの声の色香の哀愁。	◇枕詞「白妙の一衣、袂」	
2008/4/28	寄雨忍音	敷妙の床のまる寝に眺めして軒打つひまをしのぶ昔の色	一人寝る床の上で、物思ひしながら外を眺める。軒を打つ長雨の隙間に、忍ぶ草の美しい色が見える。私は忍び泣いている。	◇枕詞「敷妙の一床」 ◇掛詞「眺め×長雨」	
2008/4/28	寄風恋	ひとかたに思はくの人を松風の色はつれなき我が身にも染む	私一人並みに片思いして、あの人振り向いてくれないかと待ってみますが、松風の哀しい色はつれなくて、私の身にも染みます。	◇掛詞「ひとかたに(片一方で×普通に)」「松×待つ」 ◇参照「白妙の袖の別れに露落ちて身に染む色の秋風ぞ吹く」(定家) 「ひとかたに思ひとりにし心にはなほ背かる身をいかにせむ」(嵯円)	
2008/4/29	下泣	下泣きに落ちつむ露の玉響(たまゆら)も目を眠りて月の色人	忍び泣き、秋の露のような涙を落ち積もらせ、少しも眠れずに貴女自身のような美しい月を眺めている美女よ。	◇参照「その名も月の色人」(謡曲『羽衣』)	◆「月の色人」は美女の形容。(長満たき)
2008/4/30	下紐	初花のとくる下紐しめりして衣の雪間に赤らみぞ染む	春、雪の間から湿った蕾が出て、赤色に染み渡った初花が咲いてくるように、下紐が解ける時の女の凄絶な赤面の美よ。	◇参照「峰の雪とくらむ雨のつれづれと山辺もよほす花の下紐」(定家)	
2008/5/1	黒髪	黒髪の夕日をちぎる細(くは)しさにかなしき色を添ふる秋風	黒髪を通して見た夕日は、黒髪に精細に干切られたようで、そこに哀愁の色を添える秋風が吹く。	◇参照「きのふ、夕日のなごりなくさし入りて待りに」(『源氏物語 夕顔』)	

2008/5/1	髪掛	さびしさをつむ袖より漏れ見ゆる露けき夜半の髪のかかり端	孤独な寂しさを包み隠そうとする袖から漏れ見える、涙ぐんだ夜の女の、髪が両頬までかかる精妙美よ。	◇参照 「頭つき、髪のかかり端、いとをかしげなり」(『落窪』)	
2008/5/12	思出恋	思ひ返り春の寝覚めに眺めをれば同じあしたに月ぞ露める	春、昔の思いが甦り、寝覚めに物思いに沈んで眺めていると、あの人も迎えているはずの同じ朝に、同じ有明の月が露んでいる。	◇参照 『夜半の寝覚め』	
2008/5/28	別恋	花の雪かたみに置ける露の間も干るかたそなき袖の別れに	お互いの肩身に降る雪のように、花籠に入る忘れ形見の花は美しいが、その肩身は露の秋のように涙に濡れ、このつらい別れに、束の間も乾く時がない。	◇掛詞 「肩身に×互に×形見に×簞に」「露の間(涙の間×束の間)」	
2008/5/28	離恋	かれがれにひるよるもなき袖の上に花心なる恋の黄昏	花が枯れ枯れになるのに、昼も夜もないように、あの人と離れ離れになるこの夕暮れも、いつかは来るものだったのですね。私の乾かない涙の袖に、もう来ない浮気心のあの人を浮かぶ、恋の黄昏時よ。	◇掛詞 「枯れ枯れ×離れ離れ×潤れ潤れ」「昼夜×(涙が)干る(あの人)が寄る」 ◇縁語 「枯れ枯れ、花」	◆「花心なる恋の黄昏」が秀逸。「花心」は『源氏』『宿木』など、既出の物語性を、読み手の心に通じ巡らせる力がある。(園井長光)
2008/5/28	待恋	涙川こぬ夜あまたの浮き根にも松ぞときはの色はうつらぬ	涙の川。恋人が来ないあまたの夜、川辺の松の浮き根のように、つらい一人寝の中、涙声で待ち続ける。松の常盤色のように、変わらず永遠に。	◇掛詞 「浮き×憂き」根×寝×音「松×待つ」	
2008/5/30	絶恋	袖に余る露ぞ我が身をうつつにて片敷き渡る夢の浮橋	私の涙が、袖に余りあり、体に打ちつける現実。一人敷く袖の夢の中で、あなたに逢いに行く危ない浮橋を渡る。	◇掛詞 「身を打つ×うつつ」 ◇参照 『源氏物語 夢浮橋』	◆「片敷き渡る」は「うつつには片敷き、夢には渡る」であるが、トリッキーな圧縮・倒置表現。(戸井留子)
2008/5/30	寄柳恋	花籠(はなご)めにかれにしあとに残る身は雨おきまよふ青柳の糸	花が枯れるのと一緒にあなたの訪れが途絶えた、その夜に残る私の身は、雨がしたり落ちる青柳の糸のようです。	◇掛詞 「枯れ×離れ」「跡×後」「実×身」 ◇縁語 「花、枯る、実、青柳」 ◇参照 「青柳の糸よりかぐる春しもぞ乱れて花のほころびにける」(貫之)	
2008/6/5	隔恋	山鳥の尾の色の露ぞ床敷きてそなたの峰を染むる月影	山鳥の長い尾の赤銅色の色をしている涙が、寝床に敷き渡っています。あなたのいる方の山の峰を眺めましたら、山鳥の雄雌が隔てて寝るといふその峰を、いっそう染める月の光が照っております。	◇本歌取 「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」 「ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影」(定家)	
2008/6/6	糸姫	白妙の袖はひとへに織りとめて露を重ねる床の糸姫	真っ白な袖は一重で織りやめて、涙のほうを落とし重ねている床の糸姫である。	◇枕詞 「白妙の一袖」 ◇掛詞 「偏に×一重に」 ◇縁語 「白妙、袖、ひとへ、織る、重ね、糸姫」	◆一見、何の同情もなく孤独な女性を傍観する冷徹なまなざし、「糸姫」と言って突き放す無頓着の中に、かえって哀切の思いが流露する。(園井長光) ◆「糸姫」が「製糸・織物工場の女子工員」に対する美化語であることを考えると、戦時中の恋の叶わぬ跡後の女性にもとれる。(戸井留)
2008/6/6	織姫	星逢ひの露もかなはずよるの袖床のいとまにしほる織姫	七夕の夜にお逢いして、今までお逢いできなかった日々の涙を乾かし合うということも、少しも叶いません。そのような夜に、ただ蹴ばかりが経る袖に落ちる私の涙を、あなたのいない床の上で絞っている織姫です。	◇掛詞 「星逢ひ×乾し合ひ」「露も(涙も×少しも)」「夜×経る」「暇×糸間」 ◇縁語 「乾す、よる、袖、いと、しほる、織」	
2008/6/7	冬恋	通ひ路を夢もこず糸の花閉ちて紐むすぼほれ霜のさむしろ	恋の通ひ路を夢の中でさえも少しも来て下さらない中、梢の花も開かず閉じたままで、私の下紐も結んだままの、涙も凍る筈です。	◇掛詞 「夢も(夜の夢にも×少しも)」「来す×梢」 ◇縁語 「梢、花、紐」「紐、むすぼほる」「むすぼほる、霜」	
2008/6/7	不逢恋	いかにかとむまるねの霜も下紐もちぎりむすばぬ髪は乱れも	どのようにしてときましよう。一人寝に流す涙の霜も、下着の紐も、契りもなく思い乱れて乱れる髪も。	◇掛詞 「落かむ×解かむ×梳かむ」 ◇参照 「床の霜枕の水消えわびぬむすびもおかぬ人のちぎりに」(定家)	
2008/6/9	浮舟	かへるともうつつの間に浮く舟の露も白まぬ人のちぎりが	寄せては返すともまた打ち寄せる現実の間に浮かぶ舟は、薫から環俗の手紙を受けても断り、夜明けを迎えることはないのです。句宮との契りも。	◇掛詞 「(浜に)返る×(俗世に)還る」「打つ×現」 ◇参照 『源氏』『浮舟』～「夢浮橋」	◆『源氏物語』の結末。浮舟の運命。これがのちのちの日本文学の運命や和歌の運命をも決めたときと言える。末尾の「ぞ」は、その文学的覚悟の響きを持っている。(長満たき)
2008/6/10	絶恋	とめあへぬ軒の玉水散り落ちてこひぢのあとをわかぬ月影	止めることのできない軒の雨垂れが散り落ちて、泥に残っていた足跡を消し、恋路の跡も分からず、そこに月が照っています。	◇掛詞 「軒×退き」「泥×恋路」 ◇縁語 「とめ、玉、散り」	
2008/6/10	思出恋	今はただ花のちぎりに露分けて数を尽かせる床の面影	今となっては、花のようなひとときであった夜のために、露をかき分け、私の涙をかき分けてでもまめに来て下さった人の面影が、この床に残るばかりです。		
2008/6/10	初逢恋	すぢごとに黒髪とけどとかで来し紐ひとすぢの今宵とけそむ	この黒髪は自分でひとすじひとすじ梳いてきたけれど、一方で決して解いてこなかった下紐でした。その最後のひとすじを解いて、今夜、私は女になります。	◇対句 「すぢごとに、とけど//ひとすぢ、とかで、とけそむ」 ◇掛詞 「来し×腰紐」 ◇本歌取 「かきやりしその黒髪のすぢごとにうちふすほどは面影ぞ立つ」(定家)	
2008/6/12	待恋	まじり垂る髪も涙もほほろぎの星を片敷く夢の天橋	瞼を流れて頬で混じり合ってゆく私の髪も涙も、遠く散って行って夢にしか現れなくなったあなたを思わせる星の光と寝ながら、散ってゆくことです。	◇掛詞 「瞼×混じり」「類×ほほろぎ」 ◇参照 「さむしろや待つ夜の秋の風更けて月を片敷く宇治の橋姫」(定家)	
2008/6/13	後朝恋	明け暗れの床の上風身に染みて星を見果てぬ衣の下陰	明るくなりつつある時分、寝床の上を吹いてゆく風が身に染みる。まだ星が出ている中、乾きもしない体を衣が包みゆくことである。	◇掛詞 「星×乾し」	
2008/6/17	夏夜影	ひとりぬる夜の薄衣(うすぎぬ)をとほりては月影湿るあとへまくらへ	一人で寝ている女の衣を透き通って、真っ白な月の光が女の肌に湿る。足元から枕元に至るまで、染み渡りつつ。		
2008/6/18	忍泣	月よ見るや乙女のかなしき泣きならで音もなき夜の湿るきはみそ	月よ、見ているか。女の哀しい忍び泣きよりほかには音もない、この夜のひっそりとした極まれる情景を。	◇音 「泣き、ならで、音、なき」	◆「女を見よ」という月への呼びかけ。従って、月を、女性美を共有できる同性の男と設定している。女性美を月が言明したかのようにごまかすという心憎いトリック。(長満たき)
2008/6/20	朝影	恋衣(こひごろも)ひとりあけてもかきくれた朝影まよふ露の玉床	恋をしている女の寝巻を、一人で開いても、それで夜がそのまま明けたとしても、心は暗いままで、空も曇っていて、その女の姿も朝日の光も乱れ映っている。涙の寝床で私はまだ貞操という水神を濡さたく思いますので、私一人で濡くようなことはあっても、着物ばかりか髪さえも乱れてはだけけるようなことはしないで、一人旅を重ねよう	◇掛詞 「明けても×開けても」「(空が×心が)掻き暗る」	
2008/6/20	操	みさをにてひとりこぐとも髪だにもほだけけは果てぬ旅を重ねむ		◇掛詞 「操×水棹」「刷け×開け」	

2008/6/24	身八口	おとなひにあげぬもあけたる身八つ口秋風のみや胸に染むとて	自分が訪れても女は戸を開けないのに、女の着物というものは、身八つ口が開いている。男のためではなく、秋風が入ってきて胸に染みるように開けてあるのだ、と言わんばかりに。		◆身八つ口が開いているのは換気やおはしより調整のためとされるが、より汗をかき殿方の着物にはないことから、殿方の手を胸に入れるためだという通説がある。それを、「秋風が染みるため」とする、多重の虚構美のいじらし
2008/6/24	絶恋	潤みそめし目も離れゆかむかたみとて夜風にすべる和膚(にきはだ)の影	潤み始めた女の目が、二人が離れ離れになっても乾くようにと、最後の夜の風に、女の細やかな肌が滑るのであった。	◇掛詞「目も潤れ×目も離れ」 ◇参照「思へども身をし分けねば目離れせむ雪のつもるぞわが心なる」(『伊勢物語』)	
2008/6/24	待恋	面影を松のうきねの夢に見き涙も髪もひとりそそきて	あなたの面影を、松の浮き根のような、待っている間の憂き寝の夢に見ました。涙も注ぎ、髪もそそけているのは、私ばかりです。	◇掛詞「注ぎ×そそき」「浮き×憂き」「根×寝×音」「松×待つ」	
2008/6/25	忍恋	御端折(おはしより)の乱れは果てぬけしきにもたわみぞ余る奥の恋かな	着物の御端折りは崩れてしまっはおりませんが、よそにはそのように見えても、心はたわみにたわんでいる、秘めた恋でございます。	◇縁語「御端折り、乱れ、たわみ、余る」	
2008/6/30	寄峠恋	いつとなく恋てふものはつづらをり滝にあまぎる路のまにまに	いつということもなく、また、伊豆ということもなく、恋というものは常に九十九折りの道のようなもので、浄蓮の滝のしぶきで空が霧がかっているその下を通る道の曲がりくねりに任せて進むしかない。	◇歌枕「伊豆」 ◇掛詞「天城×天霧る」 ◇参照『伊豆の踊子』川端康成 『天城越え』松本清張	◆妹と見しはいつの七滝い まもなほ夢に尋ねてあまき 山みち (浅草大将、唱和、「うたのわ」)
2008/7/7	寄虫恋	火はあまたあまりてなく音はなきすべをいかにも我に論せ螢よ	光ばかりは余りに余って、恋の苦しさになく音は出さずにいる術を、何としてでも私に教えてくれないか、螢よ。	◇音「あまたあまりて」「なくねはなき」	
2008/7/7	寄虫恋	蚊遣火を離(か)るる影だに数知らずこぬよのなかにくゆる恋かな	蚊遣火を嫌って離れてゆく蚊の数さえ数えきれず、ましてや私を離れてゆくあの方の後姿も数知らず、あの方の来ない夜に、この男女の仲を悔い、一人で蚊遣火のように燻っております。	◇掛詞「来ぬ夜×世の中」「悔ゆる×燻る」	
2008/7/7	寄峠恋	冬すぎていかなる花やつぼむらん越えし天城の踊子のあと	冬が過ぎ、春が来て、どんな花が蓄んでいるだろう。秋の終わりに別れた、一緒に天城を越えた踊子の通った道には。	◇参照『伊豆の踊子』川端康成	
2008/7/7	忍恋	白妙の袂にしづく月影のゆるぎもやまめ下思(も)ひの果て	真っ白な衣の涙に映る月の姿が揺れて、とどまることのない、片想いの果てしなさ。	◇枕詞「白妙の一袂」	
2008/7/17	寄首夏恋	重ね着し花の袂はかはるともなさげ夏の日(ひ)にぞしかなむ	お互いに重ね合ってきた袂は、花の季節の終わりと共に薄く変わりますが、恋情は夏の日にぞしかなむ。	◇掛詞「着し×来し」「敷か×如か」	
2008/7/17	寄月恋	やすからまし身にぞ余れる恋に月満ちては欠くるならひありせば	気楽であろう。身に余るほどの、満ちたまの恋というものに、月のように満ちては欠け、休める時があったならば。		
2008/7/17	初恋	一花(ひとはな)に愛(め)でたるを知るあながちになべてあはれと思ふ心に	無理に「全ての女は美しい」と思っている自分の心に、一人の女を愛し始めている証を知るのであった。		
2008/7/18	初恋	消えなむよさらぬ心と思ひしを惜しみそめつる我が身知らるる	「消えてしまっているでしょう、こんなに大したことのない心は」と思っていたのに、その心が消えるのを惜しみ始めている自分があります。	◇参照「命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」(紀友則) 「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな」(藤原義孝)	◆人を恋い初めて、我が身も初めていとおしくなった、という気持 初々しい心情 ◆義孝などの名歌に比べると、むしろ「単純」な強さに欠けているのではないか ◆「女性の心での作」とのことで、ここはたおやめぶりで良い(水垣久) ◆改作前の「消ゆらむよ」なら、歌意の落ち着きは増すが、言葉足らずとなる。(長満たき)
2008/7/18	初恋	もの思はじよそに見むとてうち臥すをやがて明け立つ東雲の空	物思いはしまい、私のことではないと決めて、横になっだけれど、そのまま眠ることもできずに、東の空が明るくなってきたことです。		
2008/7/18	忍恋	はづかしな野辺に咲き合ふ花々は色に出でもはばかりもせで	立派なことです。野に咲く沢山の花の一つ一つが、色鮮やかになっているのに、遠慮せずにいる姿は。私は、花のようになれず、思いを秘めておりますので、恥ずかしい気がいたします。		◆野の花が憚ることなくそれぞれの色に咲き誇っているさまに対し、そうすることの出来ない自分を恥じている心 野辺に佇み、花を眺めてはうつむく少女の姿(水垣久)
2008/7/18	寄橋恋	夕されば袖の雫を相分けて名残をわたる橋の上風	夕方になると、お互いの袖に涙の雫を分け合って、その別れの場をかき分けるように吹き渡り、名残惜しさを増す橋の上風である。		
2008/7/18	秋風中黒髪	むすびあへずひとりとく夜の床の上に髪おきまよふ色の秋風	恋を実現することもできず、結んでいない髪を一人で梳き、寝巻も一人で解いている女の、夜の床の上に、女の髪の色に染まった秋風が吹く。	◇掛詞「梳く×解く」 ◇縁語「むすぶ、とく、髪」	
2008/7/18	和膚	ぬばたまの夜(よ)にかがはしき和膚(にきはだ)に静心(しづごころ)にて消ゆる	夜の間に愛らしく座っている女の柔らかい肌、静かに白い雪が降っては消える。	◇枕詞「ぬばたまの→夜」	
2008/7/18	待恋	朝置きし潮干(ひ)の間だに甲斐なくて袖漬くばかり夜も起きあゑる	朝起きた時に置いていた涙が昼に乾く間も、あの人に会えることはないのだから、涙を乾かす甲斐もなく、夜は夜で、袖がびしょ濡れたまま、眠れずに起きて座って	◇掛詞「屋×干る」「甲斐×貝」 ◇縁語「潮、干る、貝、漬く」	

2008/7/25	逢恋	由良の門にこの逢ひながら楫を絶ち名立たぬ旅を重ねてしがな	由良海峡に、今夜のこの床のままで舟に乗って楫を絶ち、誰にも知られず浮き名も立たない恋の旅を重ねたい。	◇本歌取「由良の門を渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ恋の道かな」(曾禰好忠『新古今』)	◆曾禰好忠の「行方も知らぬ恋」の歌を「逢ふ恋」の歌に転じた一首 初めての秘かな逢瀬を遂げて、そのまま世間に知られぬ恋の旅を続けたいとの心 ◆本歌の「楫を絶え」を「楫を絶ち」としたところ、一途な思い ◆歌枕は本歌においてほど効いてはいないものの、やはり一首をよく引き締めている(水垣久) ◆「楫を絶ち」は、もう戻る気もない壮絶な決意。(武田あさゑ)
2008/7/25	不逢恋	さむしろや露を片敷く黒髪にちぎりおけるは月影ばかり	寒い薙に露が置き、涙も置き、一人で寝ている私の、その涙で濡れた黒髪に千切られたように照るのは、月の光ばかり。	◇掛詞「狭筵×寒し」「千切り×契り」 ◇本歌取「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(『古今』) 「さむしろや待つ夜の秋の風更けて月を片敷く宇治の橋姫」(定家)	◆男の歌として詠まれた本歌両首に対し、女の身になっての詠 ◆「露を片敷く」は定家の「月を片敷く」からの更なる飛躍と見え、涙の露が置いた衣を片敷いているということ ◆妖艶美に迫った歌 ◆「ちぎる」という語が一首の中でやや浮いてしまっているというか、今一つ収まり切っていない印象(水垣久) ◆「ちぎり」は、「月影が黒髪により極細に裁断されて見える」の意を掛けるも、この場合は若干情趣折れか。(戸井留子)
2008/7/25	寄海恋	もろともに八重の潮路に漕ぎ出でてかかえてしがな床の浮舟	一緒に遥か遠くの海路に漕ぎ出でて、浮舟の床を重ねてゆきたい。	◇参照『源氏』「浮舟」 ◇掛詞「浮舟(舟×女)」	
2008/7/27	秋恋	ぬばたまの髪をかきやる月影のうつろふ色に秋風ぞ吹く	黒髪をかき分けるように照っている月の光の、移ろいゆく色に、秋風が吹く。	◇枕詞「ぬばたまの一髪、月」	
2008/7/27	秋恋	端山(はやま)より身に染む色の黒髪に秋風かすむ袖の別れ路	人里近い山から、身に染みるような色の女の黒髪に秋風が吹き、秋風は黒髪に霞んでゆく。我々の別れ路に。		
2008/7/27	寝姿	冬されば下臥しになほ積む夜着(よぎ)のひまを瀧る音の色のかなしさ	冬になると、夜着を何枚もかぶって眠っている女の寝息の音が、夜着の隙間から聞こえる、その愛らしさと哀しさ。		
2008/7/28	黒髪	横雲の風にたなびく黒髪よあえかに薫る別れ路の空	峰に分かれる横雲のように風にたなびいている黒髪が、か弱く薫りを漂わせている、別れ路の辺りの空よ。		
2008/7/28	待恋	秋すぎて逢ふ日はいつと白雪の心はゆきもせぬにふりゆく	秋が過ぎて、逢う日はいつとも知らない白雪の降る中、心は満足できないまま、我が身は年を経てゆく。		
2008/8/9	絶恋	忽(たちま)ちに來ぬ世心(よごころ)は露知らず日に興(け)に褪すと今日はな	前触れもなく来ない夜となったあの人の心は全く知りません。日に日に私に対する思いは褪せて、私のほうは明日こそは明日こそはと思いますが、今日という日はもうない	◇掛詞「來ぬ夜×世心」「褪す×明日」 ◇参照『伊勢物語』:「首、世心つける女」	
2008/8/9	寄野恋	玉の緒の短き床に風過ぎてとけぬ思ひぞ深草の霜	短い共寝の床に思いを寄せつつ仮寝する今、そこに風が過ぎて、解けない思ひは、ここ深草の霜のようである。	◇枕詞「玉の緒の一短き」	
2008/8/9	寄野恋	色うつる鶉衣に露落ちて心は上の深草の空	色が褪せて移ろう鶉衣に露が落ちて、涙も落ちて、心は深草の野の上の空のような、うわのそらです。	◇掛詞「上の空(上空×うわのそら)」 ◇本歌取「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」(俊成『千載』) ◇参照「いつのまにか鶉衣とほころびて」(浄瑠璃『雪女』近松)	◆鶉から再び人の姿に戻った ◆しかし衣は「鶉衣」 ◆着想の妙 ◆「心は上の空」の常套句に「深草」を割り込ませたのも面白い効果 ◆全体として、深草という陰翳深い背景を生かし切れたかどうかは疑問(水垣久) ◆京都深草よりも、浄瑠璃の『雪女』の情景にふさわしい。(長満たき)
2008/8/9	徒臥	清(すが)し女(め)のいさら黒髪句やかに月添ふ床の露の徒臥(あだぶ)し	美しい女の黒髪の細やかさが艶を見せて、一人寝の涙の床に月の影が寄り添っている		
2008/8/12	寄夏草髪	ひとりぬる髪の色夏の夏草を色ふる花の床の面影	一人で寝る女の緑の夏草のような黒髪を、さらに花のように色どる、女の姿態よ。	◇「緑の髪」	
2008/8/12	移香	大空に染む花風の色の夜(よ)に浮かべる袖を離(か)るる移り香	夜の大空に花の色香を立ち込めながら吹く風に、私も袖を浮かべてみると、花のようなあの人の移り香が、枯れるように袖を離れてゆくのでした。	◇掛詞「粘る×離るる」	
2008/8/30	秋恋	袖に露、髪に秋風染(し)み慣れてなほ松が根の浮きも知らじな	袖に露、髪に秋風が染み慣れました。私の涙、あの人の飽き心にも慣れました。それでも、根の浮いた松のように、私は泣き寝しながらあの人を待ちますが、あの人はそんなことも知らないでしょう。	◇対句「袖に露//髪に秋風」 ◇掛詞「秋×飽き」「松×待つ」「根×寝×音」「浮き×憂き」	
2008/9/12	寄女郎花恋	我が世々は花野に寄らぬ旅なれどひととは見む女郎花かな	我が人生、我が色恋は、あえて花畑に立ち寄らないような質素な旅にすぎないが、一本の女郎花、一人の女にくらいは出会いたいものである。		

2008/9/12	月影	露しのに萩が花ずりかへりてはなほ色透(とほ)し宿る月影	秋の露に湿り、涙にしおれた萩の花摺り衣が色あせてゆく中、衣の下にまで透き通って女の肌にいっそう白く宿る月影。			
2008/10/6	別恋	移り香はこの黒髪にかへすとうち臥す露のよその手枕	「私に移った君の香りをお返しします」とでもおっしゃるかのように、涙に臥せている私をよそに去っていき、他の女性に手枕することになったあの人です。			
2008/10/6	寄霜恋	とけあへぬ帯にしたがふ霜の花折りしも床に音(ね)のみくだけで	解けきらない下紐に従うかのように溶けきらない、花のような霜。ちょうど今、霜が私の下紐から、寝床に音を立てて落ち、砕けるところです。	◇掛詞「溶け×解け」 ◇序詞「霜→(折り)しも」		
2008/10/6	寄雪恋	梅の榊の簪箱籠めてなべてわびしき庭の白雪	梅や桃も咲かず、それらの花の模様の榊や簪も化粧箱に仕舞い込んだままで、まだ白雪が積もっているこのわびしい冬の庭のような、私の恋です。	◇対句「梅の榊//桃の簪」		
2008/10/6	黒髪	霧雨ににほひしをれし黒髪の闇にしたがふ色の静けさ	霧雨に湿り、美しく萎れた黒髪が、闇の色に従って紛れている様子の静けさよ。			
#####	黒髪	うちなびくにほひは空に迷ひつつ春秋とはぬ夜半の花房	夜空に迷うように揺れなびく花の房の美しさは、季節を問わない。女の黒髪も然りである。	◇枕詞「うちなびく→春、(黒髪)」		
2008/11/4	別恋	今宵よいかをらぬ風は吹きそめぬゆくへ尋ねぬ床の扇に	今宵から、あの人の移り香の香らない秋風が吹き始めました。もはや恋の成就のあてもなく、あの人の行方を尋ねず終わる、寝床に置いたままの夏の扇に。	◇本歌取「移り香の身に染むばかり契るとて扇の風のゆくへ尋ねむ」(定家)	◆辛い夜々の始まりを哀婉に歌い上げた一言 ◆「かをらぬ風」「ゆくへ尋ねぬ」と否定辞を重ね、心の屈折の深さが余情をひとしとお高めて(水垣久) ◆定家の本歌を巧みに取った、濃艶な官能性の歌。「貴方の香りにかをる風のゆくへを尋ねる」ことを二重否定において諦めた女性一人の薫香と体臭しか残らない、残酷な美の傑作。(園井長光)	◆自著「私には女性の排卵が見える 共感覚者の不思議な世界」に掲載。
2008/11/4	絶恋	待ち侘びし弁々(よよ)の日数も月草や昔の路の玉ゆらの花	あの人を待ちわびた夜は数えきれず、来てくれないまま恋は尽きた。かつてあなたが通ってきてくれた路の月草も、花びらを失い、昔のほんの一瞬の輝きとなった。	◇掛詞「弁々×夜々」「月×尽き」		
2008/11/5	変恋	常永久(とことは)に敷くは月とぞ知られるかはる枕のよその我が身に	永遠に床に敷くものは、あなたの袖ではなく、月影だと知りました。あなたのお相手が他の女性に入れ替わった今、あなたたちのよそで苦しむ私の身が横たわる枕の上で。	◇掛詞「常×床」	◆変転する恋の心を、月の不変性と対比させた趣向 ◆「よそ」は新古今歌人たちが好んで余情を含ませた語(水垣久) ◆「かはる枕」は、事情の変わりゆく三つの枕を物語って秀逸。このうち、「よその我が身」だけが酷な結末を迎える。(長満たき)	
2008/12/8	待恋	今来むと湯浴みのあとに松の根を忍びもあへぬ夜半の浮舟	そのうち行くよとあの人があるので、湯浴みして心待ちに待ちましたが、現れず、そのまま夜を過ごし、声も忍べないほど泣きながら寝る。浮舟のような女になりました。	◇掛詞「松×待つ」「根×音×寝」 ◇参照『源氏』『浮舟』		
2008/12/8	不逢恋	我が身にはならずよそにぞ初恋やつきなばつきね入相の鐘	私が身にはならずよそにぞ初恋やつきなばつきね入相の鐘。私が始めた片想いの成就のあては、その人が他の女性の元を訪ねたことで、果てました。どうせもう、私の身には誓ってこないのですから、仏僧たちよ、撞きなければ撞いて下さい、よその男女たちの逢瀬を告げる晩鐘を。	◇掛詞「初×果つ」		
2008/12/8	湯	花の髪紅葉のかたみか果てぬ色香やとほき乙女湯(をとめゆ)のあと	花のような髪。紅葉のような体。花や紅葉が枯れるように、その女の全てが失恋に傷心した。これまでに髪と体がまとっていた色香は、湯浴みと共に、全て流れ去った。	◇対句「花の髪//紅葉の肩身」		
2009/1/18	寄床恋	手鏡はただよそながら臥し起きてきても身に染む霜の袂は	自らの涙を見たくないと、手鏡は寝床から遠ざけて置いたまま、寝たり起きたりしていても、やはり涙の霜の降りた袂の冷たさは、女の身に染みて分かったのであった。			
2009/1/25	寄海女恋	涙よりほかに糺(かがよ)ふ甲斐もなし天(あま)の海辺をたづね果てても	私の片想いは甲斐もなく、流す涙だけが唯一、光り輝く貝のようです。天の海辺を訪ね回っても、他に恋の成就を告げる綺麗な貝などありません。	◇掛詞「甲斐×貝」		
2009/2/5	寄雪恋	昨夜(こそ)の髪今朝の下帯いかにして春よりのちの雪にかこたん	あの人に来てくれなかったために、昨夜から今朝まで、一度もあの人の中で梳けなかった髪、解けなかった下着の紐。春になれば雪が溶けるから、何とかしてその「とける」雪に私の身をあやかりたい。	◇対句「昨夜の髪//今朝の下帯」 ◇掛詞「(梳く)×(解く)×(溶く)」		
2009/3/2	寄雨恋	かきつけしこひちの文に雨落ちて誰が見ぬ道の瑕(きず)となるらむ	しっかり書きつけた恋文を持って、家を出る女。道のぬかるみを踏みゆく女に、雨は落ち、恋文も道に落としてしまう。いったい恋文は、お相手に見つけられないうちに、どんなにぼろぼろの傷だらけの手紙となって終わるだろう。	◇掛詞「書きつけし×掻きつけし」「泥×恋路」「文×踏み」		
2009/3/3	忍恋	知らじとぞたゆたふ月を眺むれば我が身の上の明るき日の袖	私があの人に恋しているかどうかなど自分でも知らないと強がって、なぜか揺れ動く月を眺め続けて夜を明かしたら、明るく朝、片想いの身の上である私の袖の涙に、月影が映っていました。			
2009/3/5	寄梅雨恋	袖の梅雨限りは知らじとばかりに黒白もなき南風(はえ)もそ身に染む	私の袖は、終わりを知らない梅雨のように涙に濡れている。黒南風(くろはえ)も白南風(しろはえ)も、私の身に染み入る。白黒付けられないでいる。私の片想いよ。			
2009/3/10	冬恋	幻の袖のかけはしながめて星を隔つる木枯らしの道	あの人と私の袖との間にかかった幻の懸け橋を思い描く。ふと我に返ると、懸け橋は消え、木枯らしが吹く道に雨が降り、曇り空は星々を隠していた。	◇掛詞「眺め×長雨」		
2009/3/15	別恋	人と見しことだに残る月の夜の袂さびしきときの木枯らし	せめてあの人と一緒に見た月だけが空に残る、袂が寂しい夜の時間に吹く、木枯らし。			
2009/7/20	袂	踏みまどふこひちに落つる雨の色返す浅葱(あさぎ)の花の袂に	恋文を出そうかと迷う。ぬかるんだ道を踏み悪い歩く。花のような恋の成就を夢見て裏返してみる浅葱色の袂に、暗い雨の色が落ちる。あの人と恋心は浅くて、お返しも頂けないかもしれない。	◇掛詞「踏み×文」「泥×恋路」		
2009/7/22	久恋	今はただ弁々(よよ)の日数も月草や訪(と)ひこし路(みち)に露も残らず	時が経った今はもう、月草の花びらも尽き、あの人との夜も尽きた。訪れてくれた路の月草の枯れ跡には、少々の露も残っていない。	◇掛詞「弁々×夜々」「月×尽き」「露も(少しも×秋の露も)」		
2009/8/12	少女	今宵まで少女(をとめ)は海を知らねども知らば限りの思ひ出の花	今夜まで少女は海を知らず「きたけれど、もし知ったなら、知らなかった頃の花のような願望は、それきりの古びたものとなるのである。	◇参照『寺山修司少女詩集』『海』		

2009/8/19	寄月恋	絶えし夜の涙を闇につくろへどあしたの袖にゆるぐ有明	恋が絶えた涙を、夜の闇に隠してとりつくろってみました。翌朝の袖の涙には、隠しきれない有明の月が宿っているのです。		
2009/8/19	寄雲恋	我が恋はいつよりもなき雲の絶え間も見えぬ上の空かな	私のうわのそらの片想いの心地は、どこからともなくやって来た雲が、絶え間もなく上空を覆ってしまったようなものです。	◇掛詞「上の空(うわのそら×上空)」	
2009/9/25	秋恋	我が秋夕日隠れのよしな落(あ)ゆるもみちの彩の涙に	紅葉のような紅涙がしたり落ちて色鮮やかな模様を描いている私の袂は、同じような色の夕日に強調されて、隠れるところありません。		
2009/9/26	寄衣恋	照るな月よそにやみな左襦(ひだりづま)とらぬ間も知らぬ袖の砌(みぎり)に	照るな、月よ。芸者が左襦を取らない時のように、貴女が私を受け入れてくれる時なかった、この恋の有りに。	◇掛詞「襦×妻」 ◇「左襦をとる」 ◇縁語「左、右(砌)」	
2009/9/27	青蛾	むらさきの露霜の染(し)む白衣(しろぎぬ)や青き蛾(ひる)の袖の別れに	青い蛾のように精妙な眉、壮絶な美しさを持つ貴女との別れ際、羽に露霜が降りるように、我が紅涙は落ち、貴女の白衣が紫色になってしまった。	◇「青蛾の御女は悼歌を唱ふ」『太平記』	
#####	冬恋	鶉鳴きし夜半の深草跡(あと)訪(と)へば水の鏡霜の簪	かつて秋の夜に鶉が鳴き、女が泣いていた深草の跡を訪れた。今や、鏡のように広く氷が張り、簪のように細かく霜が降り、女の使っていた鏡は氷に閉ざされ、簪も霜に朽	◇対句「氷の鏡//簪の霜」 ◇参照『伊勢物語』	
2010/8/22	秋恋	風にしむ露の我が身は秋の色吹き返す袖のよその移り香	風にして染み込むほどの涙を流す私の身は、露が降りる秋の草木のよう。風に吹き返される私の袖をよそに、あの人は他の女性の袖の移り香を聞いていることでしょうか。一人聞いている。時は過ぎ、木々の枝は秋となり、私に飽きたあの人は来なくなつた今、残された私の身に染みる風のむなしい色気を。		
2010/8/22	秋恋	ひとり聞く秋の梢に時過ぎて残る我が身にしむ風の色	袖の露。袂の紅葉。私の紅涙。色々な色気が身に染み中、あなたの飽き心を知らせる秋風の冷めた真っ白な色香を聞いている。	◇掛詞「秋×飽き」「梢×来ず」	
2010/8/22	秋恋	身にしてみても髪は(す)く秋風は頼めし果ての玉響の色	私の髪を梳き、私の身に染みながらいつそ吹く秋風は、あの人が恋を期待させた一瞬の未来の色気の、儂い果ての飽き心なのです。	◇対句「袖の露//袂の紅葉」(紅色)//なき色(白、透明)」	
2010/8/22	秋恋	ひとり寝る身にしむ色はさむしろや恋越す秋の白妙の風	一人で床に寝る身に染みる秋風の寒々とした真っ白な色は、私の恋をも通り返してゆくようです。	◇掛詞「狭筵×寒し」	
2010/8/22	秋恋	来る夜半と頼めし色を身にしめて風に恋纏る秋の糸姫	今夜はあの人に来てくれるのではないかと期待させる風の気配を身にまどって、風という生地に恋を纏っているような秋の纏姫。		
2010/8/22	秋恋	悲しみは別れかたみに雨落ちてしむ音にわたる秋風の色	失恋しても別れがたい悲しみの中、忘れ形見の雨が落ちる。身に染みる雨音を渡りゆく秋風の色よ。あなたは私に飽きたのです。	◇掛詞「別れ難み×形見」「秋×飽き」	
#####	冬恋	秋の空に胸をこがらし吹く夜半の人知れず霜になる身の果て	あなたに胸を焦がす中、秋の夜空には木枯らしが吹き始め、霜の冬がやって来た。秋に生っていた実の果てのように枯れ果ててしまう私の身も心も、私に飽きたあなたには分からないことでしょうか。	◇掛詞「秋×飽き」「木枯らし×胸を焦がらし」「実×身」	
#####	返し	空知らぬ雨に濡れ来し玉梓(たまづさ)をかりそめならで雲居にて見き	貴女が必死に書いて、雨に濡れてまで出でて下さったとは知らなかったお手紙を、遠いこの地で、雁(かり)が運んできてくれたような運命だと思いながら、しかし仮(かり)にはなく、心からしっかりと読んでおります。	◇掛詞「空(天空×全く)」「雁×仮」 ◇縁語「空、雨、雲居」「玉梓、雁」	◆本歌未掲載
#####	返し	逢はずともかたみに遠き雲ならで花たちはなを我と眺めよ	もしお会いできないうちに私が死んで、火葬の煙となってしまっても、私は雲になるのではない。雲を私の形見とは思わず、貴女と私とお互いに遠い存在だとも思わないで、貴女の庭に咲いている橘の花を私と思って眺めなさい。	◇掛詞「互に×形見に」	◆本歌未掲載
#####	別恋	床の花にほふあまたの幾夜経て別れし人は夢も忘れず	匂い立つ沢山の花のような夜の床を共に過ごしたことはもう昔、お別れしたあの人を、私は夢の中でさえ少しも忘れたことがない。	◇掛詞「夢も(夜の夢にも×少しも)」	
#####	春恋	花の恋弥生の夜にかなひても心は後(のち)の月の名を見つ	桜の花のような恋は、三月の夜に叶いましたが、心は次の四月の「卯月(うづき)」という名を見て、このまま恋が終わるのでと、疼き(うづき)で満たされております。	◇掛詞「(うづき) (卯月×疼き)」	
2011/1/5	不逢恋	まほろしや香りひとつの袖の上に恋ははかなの夜な夜な花	あの人は幻。袖の上には、私一人分の香りだけ。恋とは、夜な夜な儂い花のようです。		
2011/1/5	不逢恋	するもせぬも恋は苦しの夢のうちにすれば覚めずの春のあけぼの	恋というものは、してもなくても苦しの夢のようですが、いつのまにかしてしまつたら、もはや覚めない春の明け方の夢そのものです。		
2011/1/5	寄舟恋	袖は淵淵は高瀬の舟の櫂かひなき恋のみをつくしかな	袖は涙の淵。胸は高鳴り、高い川瀬のよう。櫂もなく漂流し、標識を見失って座礁する高瀬舟のように、身を尽くしても甲斐のない私の恋。	◇掛詞「高瀬×胸は高(し)」「櫂×甲斐」「淵標×身を尽くし」 ◇序詞「～櫂→かひなき」	
2011/1/6	別恋	ひとりきく別れかたみの虚(おほぞら)に床よりかえる黒髪(くろかみ)の聲	一人で聞いている。貴女と別れがたい中、忘れ形見としてこの寝床から虚空に立ち上る。今や幻の貴女の黒髪のさらさらという音を。	◇掛詞「別れ難み×形見」	
2011/1/7	寄梅恋	こそはむかし春のほひの袖別れ目くるめく花の櫛(しとね)残して	もう昨夜という時間は音になった。この貴女との袖の別れ際に、目がくらむほどに匂い立つ梅の花のような櫛を残して。		
2011/1/7	寄月恋	秋風のわけて身にしむ恋ころもきてはかた敷(かたぢ)果ての色人	とりわけ身に染みる秋風が、恋する私の着物をかき分けるように吹く。そんな秋が来て、私に飽きたあの人のように遠くにいる月の光だけを、この寝床に敷いて寝ることで上諏訪の温泉街をよろめき悩みながら帰る哀しき女の袖に、紅色の夕日が寂しく照る。	◇掛詞「秋×飽き」「わけて(とりわけ×分けて)」「恋衣×恋頃も」「着て×来て」	
2011/1/30	寄湯恋	上諏訪(かみすは)や帰るをなごのよろめきに夕日寂しまくれぬの袖	上諏訪の温泉街をよろめき悩みながら帰る哀しき女の袖に、紅色の夕日が寂しく照る。	◇上諏訪温泉	◆上諏訪温泉関連の贈呈歌
2011/9/6	返し	橘のむかしの恋路(こひぢ)立ち離れにほひし頃もいにしへの花	橘の花の匂いのうちに思い出すあの恋も、今は昔、大昔の花の頃のことなのだと思つて、この橘の咲く路を立ち去るしかないのだ。		◆いくたびかふみまどらん戀の道深き心をなだむ橘(光源氏、本歌、「うたの
2011/9/7	寄梅恋	消え果つるまでのうつろふ袖の櫛の残り香	現実にあるこの思い出も、消え果てるまでのものなのだ。移ろってゆく袖の櫛の残り香のように。		
2011/9/7	寄浜恋	恋ふるだけ甲斐なき冬の浜洲鳥(はますどり)あなゆむ路(みち)の芽えかへる砂	すればするほど甲斐のないこの恋。貝のない冬の渚のように。寒さが身に染みる砂浜を歩く鳥たちのように、私の恋の道も多難な歩みです。	◇枕詞「浜洲鳥→あなゆむ」	
2011/9/15	冬恋	叶ふとはいさともいさや白雪の今日ふる里の明日の冬枯れ	恋が叶うとは、もはや全く思えない今日、故郷には白雪が降る。明日はさらなる冬枯れとなっているだろう。	◇掛詞「降る×故郷」	
2011/12/5	桜夜恋	忘るなよ咲か咲かぬか定めあへず散る桜夜の我が身ばかりは	忘れないで下さい。咲くか咲かないかを迷う夜桜のように、あなたに恋を伝えようか伝えまいかを決めかねたまま散ってゆく私のことだけは。		
2011/12/6	寄盆恋	我が涙春の別れにこそぎけり袖をかたみにめぐるさかづき	この春のあなたとの別れに際し、少しのお酒を忘れ形見にしようと思いましたが、涙を袖や体に流し巡らせ、盆にまでそいでしまいました。	◇掛詞「肩身に×形見に」	

2011/12/6	寄盃恋	いとむなし宴のなくは恋絶えし我が身は人に酔ひあへぬとは	ああ、むなし。失恋し、日常で誰かに酔うことを忘れている私の身は、宴のお酒がないと誰かに酔うことができないなんて。		
#####	忍恋	黒髪のかかる肩身に泣きし夜(よ)や袖も鏡も涙忘れで	肩身にかかる黒髪のようにこれほどまでに長い夜を、泣き明かしました。袖も、鏡も、鏡に映る顔も、涙に濡れることを忘れはせずに。	◇掛詞「掛かる×斯かる」 ◇縁語「黒髪、かかる」	
#####	初恋	頼みさへ薄くれなゐの秋の実や前髪の末に木枯らしの風	実の生る秋、恋の成就の望みまでも薄紅色のように薄く、私の前髪の先に木枯らしが吹く。	◇参照『初恋』島崎藤村 「まだあげ初めし前髪の～薄紅の秋の実に人こひ初めしはじめなり」 ◇掛詞「秋×飽き」「実×身」	
2012/1/8	寄花恋	言はば嘘言はぬもまことならぬ恋咲ききらぬ花の散りもあへぬば	恋していますと言えば嘘じみている。言わないのも嘘になる。私は、咲ききらず、散り果てもしない、花のようです。	◇対句「言ふ、嘘、咲ききる、散りあふ//言はぬ、まことならぬ、咲ききらぬ、散りもあへ	
2012/1/26	旅恋	さむしるをうつむ木枯らし吹き果ててなほ一人見る袖の月影	寒い寝床をうずめ尽くすように木枯らしが吹く中、今も袖の涙に映る月影を眺めております。		
2012/1/27	絶恋	忘れじよ我が袖ばかり月影の色あまりあるあと絶えぬほど	あなたを忘れません。私の袖ばかりが涙に濡れて、月影が映っていますが、その余りある色が永久に絶えないくらいに。	◇序詞「～月影の」	
2012/2/8	首夏恋	散り果てて繁りはあへぬ五月間(さつきやみ)雨をかたみに別れ路の袖	桜の花は散り果てて、しかし、夏の青葉は茂りきらない、中途半端な五月間よ。五月雨をお互いの体に形見として浴びながら、別れの袖に涙を流し合いましたね。	◇対句「散り果てて//繁りはあへぬ」 ◇掛詞「肩身に×互に×形見に」	
2012/2/8	寄雨恋	逢ひそめし頃より寒き雨落ちてまさる曇りは中空の奥	お付き合ひ始めた頃よりも寒い雨が落ち始め、どちつかずだった曇り空は、段々と深みを増し、別れを予感させつつ天空の奥へと続いているようです。	◇掛詞「中空(天空×どちつかず)」	
2012/2/8	寄月恋	白雲の下に袂ぞ濡れ果てし心かくれず月はかくれて	白雲の空の下におります私の袂は、涙で濡れ果てました。私の恋の傷心は隠れない中、私の境遇のような曇り空の向こうに、月だけは隠れて。	◇対句「心かくれず//月はかくれて」	
2012/2/8	寄星恋	かくて夜ぞ星の果たてにとだへゆく忘れ形見の袖かよひて	こうして夜という時は、星の果てへと途絶えてゆくのだ。忘れ形見として、袖の涙にきらきらと輝く最後の光を残しながら。		
#####	寄舟恋	人を待つ袖の溼は春を見ず知られし果てに沈む柴舟	恋人を待つ我が袖の涙は、凍りついたままで、乾くことを知らない。不幸な行く末だと分かっている川下に沈みゆく、柴を積んだ小舟よ。	◇本歌取「暮れてゆく春の溼は知らねども霞に落つる宇治の柴舟」(寂蓮『新古今』)	
2012/12/1	寄寒風恋	恋すてふ実りの露に空風(からかぜ)の頼めまさるや否(いな)を知らばや	露の秋、恋をしている私に実るのは、涙ばかり。やがて来る冬のからっ風は、涙を乾かすほどのものだろうか、知りたい。	◇掛詞「否×稲」 ◇縁語「実り、田の(め)、稲」	◆変則縁語。普通は「頼み×田の実」の掛詞となることが多い。(園井長光)
2012/12/9	幻恋	朧夜の人に霞のうつせみに借りし寂しき露霜の影	春の朧月夜の霞の中で人に貸した空しい我が身に、この世に仮に借りたものだという寂しい事実を象徴する露霜の姿が重なる。	◇掛詞「霞×貸す身」 ◇参照「うつせみの借れる身なれば」(『万葉』3.469)	◆「貸す」「借る」の語は、現在のように一般化するまでは花街言葉として多用され、女の貸し借りを意味した。ここでは、「死んだ遊女の自分がこの世に現れて、好きだった人に身を貸す」意。(園井長光)